

励まし合いながら汽笛の方向へ。監視兵に汽車の車輪の回る仕草を手まねしたら、東京ダモイ（帰る）だと言う。みんな、「オー、万歳、万歳」。町が見える。汽車も、給水塔も。高い望楼が有刺鉄線を張り、さくになつてゐる。望楼が四隅にある。大きな扉の所に自動小銃を持った兵隊も……。敷地も広く、一辺が五百メートルくらいか。私達は先頭大隊、三個大隊が到着するまで半日以上も、長蛇の列がよたよたと足を引きずって到着した。点呼（人員調べ）監視兵から收容所（ラーゲル）監視兵への引き渡しか。今までの監視兵が最後の所持品検査。各自帽子やふんどしにまで大事なものを縫い付けて大切にしていたものまで全部取り上げられた。日本へ持って帰れると我慢してやっと持ってきたのに、丸裸にされた。なんでこんな事を、敗戦国のみじめさを身をもって知った。汽車を見て万歳万歳はどこへやら。五人ずつ入門開始。昭和二十年十一月中旬頃、あの望みも希望も夢もまったく絶望になつた。三年になるか五年間になるのか、見当がつかない。これから冬を迎える極寒のシベリアで生きられる

のか……。

アムール州ライチハ第十九收容所への入門で決定的になつた。

昭和十六年から二十年までの出来事であらまします。

## 青春時代に

### 抑留生活を過ごした苦い思い出

静岡県 後藤政雄

私は昭和十八年一月十日、福岡集合、関釜連絡船にて朝鮮釜山港に上陸。鉄道輸送で京城（ソウル）第二十六部隊に一時的に入隊。約一、二カ月だったと記憶しています。その後、満鉄で一路国境の街ハイラルに向かい、約一週間くらいで、真夜中ハイラル駅に到着、原隊出迎えのトラックに乗せられ第八国境守備隊野砲兵隊に無事入隊。初年兵一期の教育後、諸々部隊に転属、最後に奉天にて電信第三十一部隊に入り、東

滿の延吉に異動、昭和二十年二月中支杭州に異動。軍通信として作戦参加。その間、約六カ月。昭和二十年八月、旧ソ連が滿州国境を破り攻めこんで来たため、再び関東軍に帰り奉天で終戦、武装解除。

ソ連の口車に乗せられ黒河經由黒龍江渡河。ブラゴエシチェンスクよりシベリア鉄道で約一カ月、カザフスタン共和国カラカンド地区第十八分所に入所。戦後五十有余年、今思い出しても辛くて涙の三年間。

最初の作業は、ラーゲル（収容所）の裏山でカーミンカリエル（採石）作業。約十人に一丁の金棒を持つ、マイナス三十度くらいの寒さの中で八時間労働、空腹と戦いながら夕方まで、近くのカリクレス（火力発電所）の五時の汽笛が鳴るまでの時間の長さこと、一日千秋の思いとはこのことでしょうか。その作業も一、二週間くらいだったと思います。そして道路の舗装工事も少しの期間で終わり、次に待っていた仕事は収容所から近くにある火力発電所の深夜の石炭降ろしです。一個中隊くらいの員数で炭車に満載の粉炭交じりの塊炭が入った貨車の底を払うと、一瞬粉塵で真っ

暗になり、辺りは何も見えなくなり、その中で一時間、大きな塊炭を大きいハンマーで小さく割り、ホームの下が網状になっているからそこから下に落としてベルトコンベヤーでポイラーに送るラポート（仕事）です。空腹と厳寒と戦いながら終了して帰ると、もう朝方です。お互いに顔を見合わずと、粉塵が皮膚につき、皆誰が誰だか分からぬくらい真っ黒い顔でした。

一日中の最も楽しみは、粗末ながら朝食の時間です。最初の間数週間くらいは宿舎内に飯上げ当番が炊事場から受け取り、中隊で各人に分配するのですが、皆いろいろな容器、飯ごうの蓋、懸子、空き缶等差し出しながら、分配を異様なまなざしで、公平に分配するかを見て、ほんの少しでも不公平があれば大騒ぎとなります。食物は、当時はコウリヤン、アワ等のカーシャ（おかゆのようなもの）にスープ、これまた中身はほとんどなく塩汁程度、これが飯ごうに三分の一くらい。それに昼食用の黒パン数百グラムですが、二食分一度に食べてしまい、作業に行っても食事なしで、後は夕食の時間をお腹を鳴らして待つだけでした。

辛い長い一日のラポートが終わって宿舎に帰れば、毎日のようにまず食事の話。遙か遠い日本の故郷のことを思い出しながら、おはぎ、饅頭、味噌汁等たくさん食べ物の話、寝ても起きても絶対頭から離れませんでした。また、夢にまで見る帰国（ダモイ）の話の連続でもありました。そして疲れ切った身体をいやしなから二段ベッドに横になり明日の朝食を待つのです。

朝、起床してみれば、周りのかつての戦友で、体力の弱った者が栄養失調のため死んでいくのです。原因は二通りあると思います。一つは極端な食事不足、二番目は、不良品をたくさん食べて下痢になり、そのまま弱り死んでゆくのです。言葉には言い表すことのできない残酷なものです。亡くなった戦友の遺体の始末は、収容所の付近に穴を掘って埋葬するのですが、何しろ凍土のため一尺くらい掘るのに四、五時間かかり、深く掘れず、浅い穴に遺体を埋めた後、雪を上にかけて終わりです。寒いところで死んでも毛布一つかけられず、ひどいものです。春になり雪解け後のこと

を思うと心配もしましたが、どうしようもなく、見届けることもなく終わりました。

また、そのほかにも死亡の原因がありました。それは作業現場での事故死、そして決められた行動区域をあやまって越え、歩哨に射殺されたとき等です。千葉県出身の柘植政男君は、大事に大事に隠し持っていた腕時計を歩哨に見られ要求されたが応じなかったため、ラポート中にあることにかこつけられ銃殺されました。多分事故死くらいで片付けられてしまったと思います。

次にダム工事ですが、独ソ戦の方が終結が早く、ドイツの捕虜のダム工事を我々が引き継ぎ、酷寒の中現場のペーチャで暖を取りながら、ミキサでコンクリート打設、ラポートを続けていると、やがて長い長い冬も終わり、ツンドラ地にも春がやってきました。

次々と仕事を替えられ、今度はコルホーズ（国营農園）での農園作業でした。一個中隊約百人でラーゲルから一キロメートルくらい離れた、少しゆるやかな傾斜地を上手に利用した広大な畑にカルトーシカ（馬鈴

薯)の種まき作業です。最上部に左右に一本掘り、それから所要所に縦に堀を作って灌水するのです。種いもはマシナー(貨物自動車)で所要所に適量におろしてあるのです。何せ毎日空腹の生活の中ですから、食料にありつけるまたない絶好のチャンスです。歩哨や農園のナチャニク(監督)の隙を見て、まず最初は生で満腹になるまで食べるのですが、そのうち見つけられ、怒られますが、我々が注意されている間、外の分隊がその隙をみて食べるのです。歩哨があらちらこちらでその注意のくり返し、最後には、あきらめて我々を諭しにかかります。今この種一個で、収穫期になれば何倍にもなるから、そのときたくさん食べられると話しますが、何しろ空腹の毎日、その言葉は信用できません。今が死活問題で、食べざるを得ないのです。叱られても続けるものですから、そのうち彼等もあきらめ、ついには笑ってしまふのでした。

そして一日の作業の終わりになると、食料を蓄えるのに体の至るところに隠し持ち、宿舎に帰るのですが、ラーゲルに到着すると入り口前で身体検査をさ

れ、ほとんど取り上げられ、かろうじて二、三個逃れた薯を宿舎のペーチカで飯ごうに入れ塩湯で炊き、そのまま食べた。飯ごうの中で棒でつぶし、餅状にして食べました。また、その翌日我々が作業に出た後、舎内検査をされ、また一山くらの薯が出て来て取り上げられました。中には農園作業中、野草をいろいろ持ち帰り、收容所のペーチカで飯ごうで塩ゆでして、それを食べた(毒草とは知らず)ため、腹痛や下痢をする者や、笑い出し舎内の柱によじ登る者も出てきて、大騒ぎとなりました。翌日、收容所の役人に、日本の兵(サルダート)は家畜も食べない草を食べると、叱られたり笑われたりでした。空腹を満たすには、こんな物を食べなければならぬでした。その後、收容所の入り口に毒草の見本を並べられたのです。

毎日必死の生活の中、ダモイの噂が流れるようになり、一同、心中を躍らせましたが、なかなか実現せず、失望また失望。半ばやむなくあきらめ、その後、工場作業、建築工事等させられ、この頃よりノルマ割

りにかわり、重労働に追い立てられる日常でした。このような状態が二、三カ月続き、今度は信用できる一日千秋の思いで待ちに待ったタモイの命令が出たのです。

戦後五十有余年を過ぎ、今薄々の記憶をたどるに、多分昭和二十三年八月の中旬頃だったと思います。新品の下着だけを支給され、マシンナーに乗せられ、中央アジア炭坑の町カラカンダ駅よりシベリア鉄道約一カ月の旅で、日本に帰れる嬉しい気持ちをおさえての旅でした。日本海沿岸の帰国の基地ナホトカ港に到着、やっとここまでたどり着いたのです。しかし、諸々調査の結果再び奥地に戻される者も出て、気の毒なことと思い、また切ない複雑な心境でした。しかし我々も人ごとでなくその中に入れられるのではないかと、乗船するまでは絶対に安心できない日々でした。二、三日してやっと日本の帰国船が来たのです。朝嵐丸だったと思いますが約八千〜九千トンくらいの船で、旧日本軍の従軍看護婦が乗船していて色々世話をしてくれ、一生に一度だけしか味わうことのできない感涙に

むせび、と同時に、尊い命を失った戦友のこと、故郷の父母、姉弟、友達の安否を気遣いながら、一路舞鶴を目指して、船はやがて引揚港、西舞鶴港の岸壁に接岸。数年ぶりにして、二度と踏むことができないと思つた故国日本の土を踏んだときは、夢か誠かと、しっかり土を踏みつけ、感涙したものでした。

ここで一、二日くらいで健康診断、注射等、いろいろな手続きを済ませて、電車に乗り富士宮に到着。幾度となく夢に見た故郷、富士山を仰いだ時、再び感激しました。西富士宮の駅では、近所の人達や友人が大勢で迎えてくれたことは、今、半世紀を過ぎた今日でも、忘れる事はできません。

最後に、戦争は国民の人生がひっくり返されるものです。二度と無いことを祈ります。

また、酷寒の地で尊い命を失われた戦友の冥福を心より祈り、終わりといたします。